

2002年度3年生を送る会

第2学年が愛を込めて贈る

おやぢギヤグ の白雪姫

キャスト

白雪姫
王子
家来1
家来2
魔女
小人1
小人2
小人3
小人4
小人5
小人6
小人7
鏡の精
ナレーター.....

特別出演 3年生の担任

1組
2組
3組
4組
5組
6組

第 1 場 魔女の部屋

(ナレーター幕前に登場。)

ナレーター：昔々のことでした。ある王国にそれはそれはかわいい女の子が生まれました。
黒い髪に、白い肌、そしてつぶらな瞳。王様もお后様もとても喜びました。
真っ白い雪のように美しかったので、この子には白雪姫という名前がつけました。
しかし、まもなくお后様がこの世を去りました。そして代わりに来た継母というのがなんと
魔女だったのです。
それでも白雪姫は、すくすくと、美しい少女に育ちました。
だが、一つだけ欠点がありました。それは.....おやぢギャグを言うことでした。
ちなみに、私も今日はナレーターになれーたー。

(幕が上がると舞台中央には鏡と椅子が置いてある。魔女が鏡に向かって座って化粧をしている。まだ魔女の背中しか見えない。)

魔女：(振り向く) ホッホッホー。相変わらず美しい私。我ながらほれほれしちゃうわ。
(立ち上がって舞台前方へ)

魔女：ホッホッホー。白雪姫はもういない。森の中で殺されているはず。
これで世界で一番美しいのは私よ。
じゃ、さっそく確かめてみましょ。(そうやって鏡の前に座る)
(手を2回たたく。パン、パン) 鏡よ鏡。この世で一番美しいのはだーれ?
(じゃ〜〜ん、じゃ、じゃ〜〜ん、あちょ〜〜とブルースリーのテーマにのって鏡の後ろから鏡の精が現れる)

鏡の精：あちょ〜。
(魔女、椅子から落ちる)

魔女：いつ呼び出しても驚くわ。

鏡の精：私は鏡の精。美しい花には花の精。清らかな水には水の精。
何か聞こえたみたいなら...気のせい。

魔女：(立ち上がる) さあ、鏡の精、答えるのよ、世界で一番美しいのは誰?

鏡の精：(手を2回たたく。パン、パン) お答えします。

世界で一番美しい人、それは、森の中で、小人たちと暮らす白雪姫です。

魔女：なに〜〜! 白雪姫は死んだはず。そんなはずはないわよっ。
(と横にいる鏡の精の襟をつかんで揺さぶる) そんなはずはないわよっ。
(手を離して) こうなったら、毒入りの果物を持って、白雪姫のところに行くわ。
今に見てらっしゃい! 今度こそしとめてやるわ。(魔女、上手に去る。暗転)

第2場 小人たちの家

(白雪姫下手からかごを手を持って、歌いながら現れる)

白雪姫:(くるっと回りながら) さあ、今晚のおかずはおでんよ。

みんなのために用意しなくっちゃ。(鍋のところに行く)

(上手から、箱を持った魔女が現れる)

魔女: こんにちはー(白雪姫気がつかない) こんにちはー

白雪姫:(ちくわを持ちながら) あら、ちくわと一緒に こんにちは。

魔女: さむっ

あら、おいしそうなおでんね。いったいいつ食べるの?

白雪姫:(こんにゃくを持ちながら) こんにちはは 今夜、食う(こんにゃ、くう)、なんちゃって。

魔女: さむっ

(一人客席の方を向き) 間違いないわ。白雪姫は生きていた。このしょーもないおやぢギャグ、王様から受け継いだ寒すぎるギャグ、白雪姫に間違いないわ。

魔女: それにしてもすてきなお家ね。

白雪姫: ううん(首を振る)

(天井を指さして) 天井に、穴あいてんじょー

魔女: さむっ

白雪姫: 屋根にも穴があいて、やーねー

魔女: さむっ

白雪姫: ところで、何かご用ですか?

魔女: はぁーい。宅急便でーす。

白雪姫: えっ? 宅急便?

魔女:(箱から卓球のラケットと瓶を取り出して、ラケットを振る) しゅっ、しゅっ

白雪姫: 何それ?

魔女: 魔女の(間)、卓球(間)、瓶、なんちゃって。

(一人客席の方を向き) いけないわ。白雪姫のおやぢギャグがうつったわ。

魔女: お届け物です。

白雪姫: まあ、うれしいわ。

魔女: それじゃ、さようなら。

白雪姫:(箱かららっきょうを取り出して) さいならっきょ

魔女: さむっ(と言いがらも、家の陰に隠れて、白雪姫の様子を見る。

白雪姫、ステージの中央に箱を置き、その前に座る)

白雪姫:(箱からしその葉を取り出し) このしそ、おいしそ~。

白雪姫:(箱からパパイアを取り出し) 父上の嫌いなパパイア。

白雪姫：(箱から洋なしを取り出し)洋なしには用なし。(とって放る)

白雪姫：(箱をひっくり返すとバナナが一つ落ちる。箱の中をのぞき)

あれっ、ミカンが見っかんな〜い。

白雪姫：しかたがないわ。大好物のバナナを食べましょ。

(一口食べる)うっ、うっ(胸をかきむしる)

もしかして、もしかして、このバナナには毒が.....

そんな、そんな、そんなばなな〜〜(とってぱったり倒れる)

(魔女家陰から出てくる)

魔女：ほっほっほ〜。これで、世界で一番美しいのは私よ。ほっほっほ〜。

じゃ、確かめてみようかしら。(そう言って指をぱちんと鳴らす)

(じゃ〜〜ん、じゃ、じゃ〜〜ん、あちょ〜〜とブルースリーのテーマにのって上手から鏡の精が現れる)

鏡の精：あちょ〜。

(魔女、こける)

魔女：いつ呼び出しても驚くわ。

鏡の精：私は鏡の精。美しい花には花の精。清らかな水には水の精。

熱が出たなら...風邪のせい

魔女：(立ち上がる)さあ、鏡の精、答えるのよ、世界で一番美しいのは誰？

鏡の精：(手を2回たたく。パン、パン)お答えします。

世界で一番美しい人、それはあなたです。

魔女：ほっほっほ〜。

そうでなくっちゃいけないわ。(再びぱちんと指を鳴らすと、鏡の精が上手に去る)

ほっほっほ〜。ほっほっほ〜〜(そう高笑いをしながら上手に去る)

(しばらくすると小人たち、下手からディズニーのテーマソングを歌いながら現れる)

小人1：わっ、大変だ！白雪姫が。

小人2：倒れている！

(みんなで周りに駆け寄り、白雪姫を囲んでしゃがむ)

小人3：大変だ！

小人4：大変だ！

小人5：大変だ！

小人6：(三角定規を取り出し、底辺を指さして)底辺だ！

小人7：無視！(と言って下手を向く)

小人1：いったいどうしたらいいんだ！

小人2：ぼくにはわからない。

小人3：どうしよう。

小人4：どうしよう。

小人5：どうしよう。

小人6：(銅メダルを首にかけて)銅賞!

小人7：無視!(と言って下手を向く)

小人1：誰か何かできないのか?

小人2：姫の息を吹き返す方法はないのか

小人3：誰か知らないのか?

小人4：そうだ,いい方法がある

小人5：えっ?どんな方法?

(小人4家陰から松の盆栽を持ってくる)

小人4：このまつにおまかせくださりませ。

小人7：無視!(と言って下手を向く)

小人4：ちょっと待つ!

小人4以外：無視!(と言って123は上手,567は下手を向く)

小人6：しかし,こんな時には王子様が現れて,キスをしたら白雪姫は目覚めるはずだぞ。

小人7：そうだ,そうだ。王子様は来ないのか?

(舞台暗転,上手にスポットライトが当たる)

(赤の家来と,黄色の家来が上手から現れる)

2人：ズンチ,ズンズチ,ズンチ,ズンズチ

家来たち：王子のために大きな拍手

2人：ズンチ,ズンズチ,ズンチ,ズンズチ

家来たち：王子のために大きな拍手

家来たち：王子様のおなり～～

(上手に再びスポットライトが当たり,ファンファーレが鳴る)

王子：じゃじゃ～～～ん

(王子スポットライトの中で一人目立つ)

王子：私は王子。

(小人たちのところに近づいていく)

王子：みなさん,ここで何をしていますのですか。

小人1：はい,姫が毒入りバナナを食べて,眠ってしまったのです。

小人2：わたし達には何もできません。

小人3：しかし,王子様が現れて,優しくキスをすると,姫は目覚めるはずですよ。

小人4：王子,ぜひ,姫を目覚めさせてください。

王子：なるほど,そうだったのですか。

何をかくそう,鳴和のプリンスとはこの私。

(王子姫のそばに行く。そして倒れている姫の上半身を抱きかかえて起こす。それから、ぐったりと横(客席側)を向いている姫の顔をしっかりと自分の方に直す。そしてしばらく見たあと、手を離し、姫を落とす)

小人5：王子！いったいどうしちゃったのですか？

王子：この顔、私の趣味じゃない。

小人6：そんな、じゃ、白雪姫はどうなるんです。

小人7：ここで白雪姫が目覚めて、王子と結婚するはずだったのに。

王子：(立ち上がって)帰る。

小人3：(王子にすがりつき)せめて、姫が目覚める方法を教えてください。

王子：しかたがない。教えてあげよう。

姫を助けるためには、呪文のカードがいる。

小人4：えっ？呪文のカード。

小人1：その呪文のカードって、どこへ行けば手に入るんですか？

王子：それは、森の中だ。

小人2：森の中？

王子：森の中をどんどん行けば、元気が出てくる。

小人5：それってもしかして.....

王子：元気もりもり.....なんちゃって

小人7：ところでその呪文のカードって森の中のどこにあるのですか？

王子：呪文のカードは6枚集めなければならない。

(小人たち全員立ち上がり、王子を囲む。)

王子：1枚目は森の中の西の方だ。(職員席の岡田先生のいる方を指さす)

小人6：あそこには岡がありますが.....

王子：そうだ、1枚目はその岡だ〜〜。

小人1：じゃ、2枚目は？

王子：2枚目は、その岡の上に銅像がある。その銅像はどんなポーズだ？

小人2：はい、正座していますが。

王子：そうだ、2枚目はその正座の銅像のところだ。

小人3：じゃ、3枚目は？

王子：3枚目はその岡の近くに塔が立っている。その塔は何でできている？

小人4：白い石ですが.....

王子：そうだ。その白い石のところに呪文のカードがある。

小人5：4枚目はもしかしたら、あの谷ですね。(と上谷先生の方を指さす)

王子：そうだ、そろそろわかってきたな。あの谷の上の方に呪文のカードがある。

小人6：では、5枚目は.....

王子：もちろん東にある。

王子：そして、6枚目は.....

小人たち：(声をそろえて指を指し)あの幽霊屋敷のそばですね。

王子：そうだ。その6枚の呪文のカードをそろえると、姫が目覚めます。

小人7：そうだったのか。よしみんな、呪文のカードを見つけに行こう。

小人たち：おう。

(小人たち、バラバラになって、客席へ散っていく)

王子：では、さらばだ。(そう言って、王子と家来上手に「ズンチ」を踊りながら去る)

(小人たち舞台へ降りていく。そして、カードを持っている3年の先生をステージへ連れてくる)

(それぞれ次の絵が描いてあるカードを持っている。

岡田 アリ, 清左 蛾, 白石 塔, 上谷 ピストル, 東 ×, 屋敷 手)

(6人を「塔」「蛾」「手」「アリ」「×」「ピストル」の順に並べておく)

小人1：しかし、いったいこれはどういう呪文なのだろう？

小人7：さっぱりわからないぞ。

小人6：みんな、よく考えよう。そうしないと白雪姫は目覚めないぞ。

小人2：(「塔」の絵を指さして)これは白い石でできた塔のところにあった、「とう」だ。

小人3：ああ、それは間違いがない。

白石先生：とうとうわかった？

小人たち：おやぢギャグ～～

小人4：(「蛾」の絵を指さして)これは正座していた銅像のそばにあった。「が」の絵だよな。

小人5：それも間違いがないぞ。

小人3：(「手」の絵を指さして)これはあの幽霊屋敷にあった「て」の絵だ。

小人1：あの岡の上にあった「あり」の絵も間違いがない。

岡田先生：アリの絵がありました。

小人たち：おやぢギャグ～～

小人7：(「×」の絵を指さして)しかしこれは何だ？マルバツのバツなのか？

小人6：きっとバツだよ。

小人7：じゃ、最後のこのピストルって何なのだ。

清左先生：ピストルを英語で言えば？

東先生：ガンよ。

小人6：じゃこれは「がん」

上谷先生：ばれてしまったか。が～～ん。(とよろめく)

屋敷先生：あのー、私もしゃべらせてもらっていいでしょうか。

小人2：ええ、どうぞ。

屋敷先生：おやぢギャグ思いつかなくて、「手」の絵をひっくり返すと、「1000円札」の絵が出てくる）どうも、すみま千円。

小人4：しかしこれはどういう意味なんだ？

小人5：（順番に指さして）とう、が、て、あり、ばつ、がん
さっぱりわかんない。

小人3：しっかり考えないと、白雪姫が目覚めないぞ。

小人7：そうだ、わかった。

小人2：どういう意味？

小人7：だってほら、よく見たら、クラス順に並んでないじゃないか。

小人1：ほんとだ。

小人7：だから、クラス順に並び替えるんだよ。

小人4：なるほど。（そう言って、小人たち、6人をクラス順に並べる）

小人7：そうすると、こう読めるんだよ。

あり、が、とう、がん、ばつ、て

小人たち：ありがとう、がんばって

（小人たち、それぞれの絵を文字に換えたもの「あり」「が」「とう」「がん」「ばつ」「て」を持ってきて、3年生の先生方の絵と交換する）

小人たち：3年生ありがとう

小人たち：3年生がんばって

小人7：これが魔法を解く呪文だったんだよ。

白雪姫：（のびをして起きてくる）う~~~~ん。あ~よく寝たわ。

騒々しいわねえ。せっかく楽しい夢を見ていたのに。いったいどうしたのよ。

小人3：姫、目が覚めましたか？

小人2：魔女の魔法で眠っていたんですよ。

小人4：それを呪文で目覚めさせたんです。

白雪姫：え~~~~っ。私とても眠かったから寝ていただけなのよ。

小人たち：え~~~~っ。

白雪姫：睡魔に襲われていたのよ。睡魔のせいよ。睡魔が悪いのよ。どうも、すみません。

（小人たち、がくっと倒れる）

ナレーター：こうして睡魔から目覚めた白雪姫は、相変わらず、おやぢギャグを言いながらも、幸せに暮らしたそうです。でもあまりにも寒いギャグばかりだったので、白雪姫は、しまいには白け姫と呼ばれるようになったそうです。

では、3年生のみなさん、本当に長い間ありがとうございました。そして、これからも頑張ってください。これが2年生からのメッセージです。

（幕が下りてくる）